

敦煌遺書活字本第一集解題

一、沙州地志殘卷 後漢乾祐二年撰 (No. 2691)

此の殘卷は佛典の裏面に拙劣なる文字を以て記さる。其の五代漢の乾祐二年(949 A. D.)の撰に係ることは殘卷第二行第三行の記する所に依りて知るべく、第五行に「今大漢乾祐六年己酉歲」とせるは、干支を以て考ふれば二年の誤に外ならず。卷中沙州境内の山水城邑等の名と道里とを記することの密なる、スタイン氏獲る所の燉煌錄及び唐光啓元年書寫の沙州地志に優り、殊に卷首敦煌莫高窟に關すと思はるる記事に於て、之が永和八年(九年の譌)の創建なることを示せるは、今殆んど唯一の史料と爲すべきが如し。殘卷は其の半にして道里の記述を了るや、「一々細說別有本」とし、以下前に沙州金光明寺に住みたる王和尚の讚を載せたるに考ふれば、此の書の内容は單に地志の記載に止まらずして、諸種の事項を雜載したるものなるが如しと雖、然も今にして此の殘卷の重んぜらるべき所以は、一に繋りて地志の上に在りと謂ふべし。

二、張氏勳德記殘卷 (No. 2762)

此の記は沙州の張氏一族の事蹟を記せるものにして、前後共に殘缺せり。或は碑記を抄寫し、之に註釋を加へたる